白　夜

第 37 号

北海道スウェーデン協会

2016．6

所　感

杉本　拓

先にスウェーデン・日本友好国会議員連盟訪日調査団が，開業早々の北海道新幹線で函館に到着し，函館及び札幌を中心として北大，医療・福祉施設及びコミュニテイ活動などを熱心に視察した中で，折々スウェーデン交流センター，交流関係団体及び個人と多く交流の機会を持つことができましたことを嬉しく思います。

この成果については終始随行された川崎一彦先生からのご報告からもうかがえます。

このことは，北海道のスウェーデン関係者が訪問団の目的を十分配慮したうえでの「おもてなし」の賜物と心から敬意を表します。

さて，この度の訪問団15人の中で９人が女性議員でした。

最近のOECDの発表によるとスウェーデンの女性就業率は80%，女性議員の比率は43.60%（世界４位）となっており，日本の11.60%（世界147位）を大きく上回っています。

昨今日本女性の社会での活躍を進める様々な意見が各方面から提案されている中で2015年「女性活躍推進法」が成立し，本年４月１日から施行されました。これからの進展が期待されます。

スウェーデンの女性就業率が高いことについて，スウェーデン在住の高見幸子さんが詳しくお話しされていますがその中から一部紹介します（インターネット）。

スウェーデンも30年前までは日本と同じように保育システムが整っていなかったこと，そして日本のように「専業主婦」という社会的地位（役割）がないことなどから働くことを選んだそうです。更に離婚率の高まりが就業率アップつながったこと，働くことで社会に参画したい，

創造したい，自由を得たいと言った自己実現のニーズが満たされることなどからです。その代わりに働いている間，子供を安心して預けられるように質の高い保育を社会に要求し，実現してきたということでスウェーデン女性は，保育，医療，福祉，教育分野で働く人が多いとのことです。

日本において女性議員が極端に少なく，これを解決することは大きな課題でしょうが，我が国で歴史上，特に明治以降様々な分野で活躍された女性が沢山いることは言うまでもありません。昨今その人物をモデルとしたドラマや，メディアの記事などで盛んに取り上げているのも女性の活躍を意識した時代の流れでしょうか。

我が国女性の就業率も少子化，高齢化が進展する中で向上していくものと思います。

しかし，スウェーデンにおいて女性が自己実現していると言っても，大企業で華やかな職種についている人や芸術家が多いわけでは決してないとも語っています。

今後日本において女性が自己実現のための社会活動，就業率を高めるためにも労働条件や社会保障の充実が求められます。国際交流によってお互いが学び合うことの大切さを実感しました。

〈北海道スウェーデン協会会長〉

森元誠二駐スウェーデン特命全権大使講演会

スウェーデンの現在
～スウェーデンと日本を取り巻く課題～

2015年７月６日、公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター、北海道スウェーデン協会、在札幌スウェーデン名誉領事館、一般財団法人スウェーデン交流センターの四団体共催、ホイスコーレ札幌の後援による平成27年度第三回北方圏講座が開催されました。

日本とスウェーデンを取り巻く様々な課題、さらにこれからの両国関係等について、森元誠二駐スウェーデン大使の講演が行われましたので、その一部を報告します。

何故北海道へ

私の前任者である渡邉大使が北海道出身ということもあって、大使就任早々から北海道訪問を希望していました。また、当別町とレクサンド市、枝幸町とソレフテオ市という、北海道とスウェーデンの２都市の間に活発に行われてきた友好姉妹都市関係も理由のひとつです。この地を訪れ、みなさまとお話ししてみたいと思って参りました。

赴任地スウェーデンの印象

ヨーロッパの他の国の人々と北欧ヨーロッパの人々の生活様式・心情は非常に違うと思います。スウェーデン人はヨーロッパの中で日本人の心情に非常に近い人々と言えます。日本とスウェーデンとの関係を考える場合に、数字の１と２というのがキーになります。人口は日本の12分の１、大変小さい国ですが、他方で国土の面積は日本の1.2倍ありますので大変広い国です。スウェーデンでも大都市集中が進んでおり、ストックホルムはさらに人口の10分の１、今や100万人近くが住んでいますので、逆にいえば北の方へ行くほど過疎が進み、人口密度は大変低いと言うことになります。

王政ですが、昨年の秋の総選挙で８年ぶりに政権交代が生じ、スウェーデンの伝統的な政治パターンに戻った形で社会民主党が与党を担っています。議会は一院制で349議席。比例代表制なので党の名前にチェックし、個人の名前を書くことはなく任期は４年です。

在留邦人の方は3,000名を超えますが、このうち実に３分の２は女性です。企業で働くスウェーデン人の方々が研修あるいは仕事で来日し、日本女性と知り合って結婚という例が大変多いそうです。スウェーデンに進出している日系企業は約130社です。

スウェーデンは王政ですが王様には政治的な権限がなく、首相を任命する権限すらありません。首相を任命するのは国会の議長です。スウェーデンはEUの加盟国ですが、ユーロには参加せず、通貨はスウェーデンクローナのままです。スウェーデンの近代史を見ますと、100年近くは社会民主党が政権を担ってきて、国は、国民ひとりひとりのための「国民の家」という概念を導入して、社会保障・教育制度、社会福祉を推し進めてきました。しかし、昨年の選挙までの２回の選挙では、リーマンショックの影響で経済が停滞し、より自由経済を標榜する保守党が２期だけ政権をとりました。しかし、この間に経済がよくなったものの、社会福祉がおろそかになり、例えば、看護師が足りない、がん治療がなかなか受けられないという国民にとって大変重要な社会福祉・教育といった面で劣化し、昨年の総選挙では政権交代が起こりました。

「国民の家」を実現する政府は国民にとって大変重要で、いわば「大きな政府」です。「政府というのは小さくて権能が少なければ良い」とは逆で、スウェーデン人は「政府は権限があれ

ばあるほど自分たちの面倒をみてくれる」のでその方が良いという発想で物事を考えています。これはアメリカ人や日本人の政府に対する考えとは大きく異なります。その大きな政府に対する期待も高いだけに、国民の関心の度合いも高く、常に政治には透明性が求められ、選挙では必ず８割を超える投票率があります。

政治家は本音ベースで議論を戦わせます。質の落ちてきた福祉・教育・介護・社会福祉を充実させてくれという声が高まったので、政治は与党野党を問わず、それを実現するために増税が必要であるということを明確に総選挙前に国民に対して公表しました。増税を掲げて選挙戦を与野党が戦うという構図は日本では見られない形だろうと思います。

昨年10月、ロヴェーン政権が成立した時の閣僚の半分は女性です。ユニークなのはさらにロヴェーン首相は政治家として国会議員であったことは一度もありません。里子に出された親のもとで育てられ、そこから這い上がってきて社会民主党を支える労働組合の委員長を長年にわたって勤めあげ、最終的には昨年末に首相になりました。ただ、社会民主党・社民党、環境党、緑の党の左派連立だけでは議席の過半数には達せず、残念ながら政権基盤の脆弱さは否めません。

スウェーデンの国家予算は約１千300億ドル、これは東京都の予算とほぼ同じです。東京都より少ない人口と東京都と同じ予算規模で、徹底した面倒見のいい社会を築きあげています。このモデルは人口が１億２千万の日本、あるいはそれを超える人口の中国やインドではとてもできない仕組みだろうと思います。スウェーデンは大変高い生産性を誇っていて、一人当たりGDPでは５万５千ドルを超え、日本の1.2倍です。

スウェーデンの産業基盤とそれを支える「もの造り」のこころ

スウェーデンを貿易立国というと、スウェーデン人は決して良い顔をしません。貿易立国というのはオランダやイギリスのように東インド会社を作って、右のものを左に回して生計を立てると言うメージです。スウェーデン人は、自分たちの国を、手に職を持ち、技術を持って製造業で成り立っている製造立国であると誇らしげに言います。対外貿易のうち自国で作ったものを輸出してGDPを稼ぎ出す比率は半分に及びます。対日貿易は、ここ数年、ずっと日本の赤字基調です。2014年で約1000億円弱の貿易赤字を日本は抱えています。スウェーデンの産業政策は自由競争を徹底して推進しています。VOLVOという会社は業績が低迷した際に中国の資本が助け、スウェーデンのエンジニアに車を作り続けさせています。スウェーデンの車ですが国籍は中国の会社だといって良いかと思います。VOLVOと並ぶSAABという会社がありましたが、SAABの業績が悪化した際、政府は破産やむ無しとして手助けをしませんでした。基本的に公的部門が民間活動を支援するということは一切行いませんので、自由競争に負けた者は市場から去っていくのが当たり前というのが政府の方針です。これは社会民主党・保守党どちらの政権であっても同じです。

拡大するスウェーデンと日本の産業協働

スウェーデンと日本との産業協働ではユニークな事例があります。重機メーカーのコマツがスウェーデン北方の林業地帯の会社を吸収合併し、木材の枝を切る機械を現地生産して世界中に輸出しています。スウェーデンの森林は山の中というよりも丘の上の平らなところにあるので重機が入り易く、一本の木をガチャンと掴んで、瞬間に「バババッ」と全部の枝を落とし、落としたら今度はパンパンパンと切って加工する。前もってコンピューターに入力された仕様に応じて加工するので、一本の木を切り倒したときには、つまり注文先の仕様の木材が目の前に並びます。スウェーデンの保有技術をコマツの重機に搭載し、高い生産効率を誇る伐採機と

して組み合わせたところが日本とスウェーデンの協力なのです。

この秋、市場投入される三菱リージョナルジェット（MRJ）の事例もあります。三菱重工が作っている飛行機ですが、この整備マニュアルはSAABの整備マニュアルを準用しています。SAABの自動車製造部門は破綻しましたが、軍事部門は健全な会社で、スウェーデン製戦闘機グリペンや駆逐艦を作っており、軍事部門では突出した技術を持っています。三菱の人に「どうしてSAABの整備マニュアルをMRJ用に使用するのですか？」と尋ねましたら、「国際市場でこのジェット機を販売する際に、SAABの整備マニュアル仕様に合致しているというだけで、航空機の評価が上がるので」との答えでした。SAABのお墨付きを得ているという、目に見えない協力も日本との間で行われています。

スウェーデン社会（スウェーデンモデル）の課題

スウェーデンの社会は、国民の家という理想を掲げて高度福祉社会を築きあげてきました。渡邉前駐スウェーデン大使がスウェーデンモデルと名付けた、世界に冠たるシステムだと思います。基本的に政府は国民の生命財産、さらには福祉の水準を守る必要があり、女性が１人で夜に歩けない社会は改善すべきで、安全の確保は政府の役割であり、そのための必要な負担は国民自身が甘受すべきという議論が行われてきました。

社会保障給付のためにGDPの30％近くを費やし、国民が税や社会保障費として負担する割合はGDPの40％を超えています。かつては６割を超えていました。今でも50％を少し下回る位だと思います。

日本は多くをスウェーデンから学んでおり、毎年のように、保健・介護・医療の分野で調査団が渡瑞し、多くの調査報告書が上梓されています。基礎年金の制度や、認知症の高齢者のケアのしくみなどはスウェーデンから学んだといわれております。しかし、学ばれる対象のスウェーデンにおいても、最近はさまざまな問題が生じています。

スウェーデンにおける医療問題

スウェーデンは地域の家庭医主義で、家庭医で対応できなければ次のレベル、最後は高度医療設備・技術のある大学総合病院の医療という順番になります。最初からなんとなく具合が悪いから大学病院に行きたいと希望しても不可能で、それを許すと無尽蔵に医療費が膨らんでしまいます。しかし、最近の問題は、癌や脳梗塞等の高度な医療技術を持つ病院の受け入れ能力を遙かに超えた需要があることです。例えば癌患者ですと、癌治療の待ち時間が長すぎるといった問題も生じています。また、ストックホルムに高度医療施設が集中し、地方に高度医療施設が立地していないという格差も問題になっています。

日本では病院で診察を受けるとすぐ抗生物質や薬を数多く処方しますが、スウェーデンではむやみに薬を出しません。スウェーデンでは、風邪やインフルエンザで処方されるのは100％解熱剤です。インフルエンザはウィルスなので、抗生物質が効きません。自分の体力で治しなさいというのが原則です。もちろん炎症をおこして肺炎になった場合は例外ですが、かなりひどい症状のインフルエンザになっても抗生物質を処方してくれることはありません。最近、欧州で問題になり、スウェーデン人も神経質になっていますが、豚やチキン、サーモンに至るまで、成長剤や抗生物質、駆虫目的のホルモン剤を使うことが一般的になり、抗生物質の効かない耐性菌の存在が報告されています。スウェーデンは抗生物質を極力使わない社会を目指していると言っても過言ではありません。

認知症の問題というのはスウェーデンでも深刻化しております。シルヴィア王妃は、1995年（平成７年）に認知症の方々のためにシルヴィ

アホームを開設しました。デイケアセンター機能のみならず、そこに世界中の認知症に携わる看護師の方々を招いて、認知症の対策や介護の仕方を学ぶ施設です。シルヴィアホームと提携している日本の団体もあり、毎年数名シルヴィアホームで研修を受け、認知症介護の専門家とし日本に戻って来ています。

今年の５月、シルヴィア王妃が認知症フォーラムを初めて開催し、世界から認知症専門家を招いて、様々な角度から認知症という問題を議論しました。医学だけではなく、社会学、家族関係を含む福祉学など幅広い分野から認知症の問題を扱ったのですが、認知症の専門家として博士号をもつシルヴィアドクターを、ようやく10年経って輩出出来たと報告されています。このシルヴィアドクターは、これからスウェーデン国内外に対して認知症の最新の知識とメソッドを広めていく役割を担っています。

スウェーデンと日本の王室外交

スウェーデンの王室と日本の王室とは大変に緊密な関係にあります。私が赴任するにあたって両陛下にも皇太子殿下にもお目にかかり、スウェーデンのお話をいたしました。スウェーデンの王族のお話に関する限り私よりはるかに両陛下の方がご存知で、王族の来日の度に吹上御所にお招きになり、ある意味でプライベートなお付き合いもされています。グスタフ国王は、公私を含めて16回、日本にお見えになっておられます。

天皇陛下は、皇太子殿下として1985年に最初の公式訪問をされています。その後、2000年および2007年にも訪問され、特に2007年はリンネ生誕300周年という記念すべき年に訪問され、ウプサラ大学でリンネについて講演をされました。現地の人からもしばしば話題になるぐらい講演の内容が素晴らしかったとのことです。スウェーデンの王室と日本の皇室の最近の関係では、６月初めに高円宮妃殿下がフィリップ王子のご成婚のために来訪されました。高円宮妃殿下はその前のマデレーン王妃の結婚式にも来訪されています。

手堅いスウェーデンのエネルギー政策

スウェーデンは想像以上に原子力大国です。水力発電が48％、原子力発電が40％の比率で、他のヨーロッパ諸国に比べると再生可能エネルギーは少ないと言えます。東日本の大震災が引き起こした福島原子力発電所の事故については、スウェーデンの人たちは安全な原子力エネルギーの重要性を再認識させられたと理解し、原子力政策そのものが揺らぐということはありませんでした。

スウェーデンは低レベル・中レベル・高レベルの放射性廃棄物をそのまま地下に貯蔵する計画が既に出来上がっており、国民のコンセンサスもしっかり取れ、中レベル放射性廃棄物が岩盤の下500m位の所にもう貯蔵が開始されています。放射性廃棄物処分場の場所についても、住民の納得が得られた選定が行われています。原子力エネルギー政策が若干微妙な点は、社会民主党と緑の党が組んだ政権となりましたので、緑の党は原子力に対してより消極的、慎重だということです。

女性が活躍する社会をめざして

スウェーデン社会における女性の社会進出には著しいものがあります。閣僚の半分は女性、国会議員の43％は女性です。専業主婦、これは20から64歳までの労働人口の女性のうち２％しかいません。原則女性は全部働く、家から出て働くという仕組みになっています。管理職に占める女性の割合は36％ですが、政府はこれを40％にしようとしています。民間企業での割合は低く、政府部門、公的部門の比率は高く、日本の％の絶対値は遙かに低いのですが、傾向は日本と同じです。スウェーデンをお手本に日本で女性の社会進出を促す方策を考えると、保育所から始まって１歳以上の子どもを確実に預けられる施設が身の回りにあるということが前提

ですが、税制をスウェーデンのように世帯課税から個人課税にまず変え、配偶者控除を廃止し、基本的に女性が働いたその給料の中から年金や社会保障医療を払うような仕組みにする。配偶者控除はないので、女性も自分で将来の年金を確保するために働かざるを得ないという仕組みになります。もしも、自分の収入から納税をしていないと最低限の生活保護レベルの年金、医療費等になりますから、普通の女性は自分で将来設計ができる年金を得られるように働かざるを得ません。ある意味で、女性の社会進出は厳しいと私は思います。結婚して子どもを産んで、家庭で温かいご飯を作るのが一番幸せだなんて発想はありえないと言うことです。しかし、無理があるかなと思うのは、女性の精神疾患とか病気の率は高い事実を目の当たりにしますと、仕事をした上で家庭と育児を両立させながら１年365日駈けずり廻るのは、それなりに女性の方に重い負担が掛かるのかなと感じています。

スウェーデンでは義務教育から大学まで教育費は無料、産休は男女平等にカップル２人併せて480日まで取得でき、その間に８割の所得補償があります。男性の側にも意識改革が十分なされていて、夫婦で産休を１年間取得するのが通常なのですが、男性は２ヶ月とらなければ８割の所得補償がない、女性も２ヶ月とらなければ８割の所得がないという形で、男性も女性も最低２ヶ月の休みをとりなさいと言う仕組みを作り、男女が等しく育児に携わる制度にしています。ここに至るまでは平坦な道程ではなく、1970年代からプロレスラーが子どもを抱いた写真を用い、男性に向かってあなたがたも子育てをしなさいという時代が来たという、上からの社会全体の意識改革が進められ、男性中心の社会の発想を変えるためにスウェーデンもずいぶん時間をかけ苦労しました。

ヨーロッパの政治体制の緊張

ユーラシアグループというアメリカのシンクタンクが、2015年最大のリスクはヨーロッパの政治だと掲げていますが、この半年の動きをみてもまさにそういう感じがします。フランスやデンマークでのテロでもそうですし、ギリシャの危機もそうですし、難民問題も然りです。ヨーロッパ全体が混乱していて、日経株価も大幅に下がりました。ウクライナやクリミア問題がある中で、ロシアとヨーロッパとの関係もどうなっていくのか不透明感があり、大変難しい問題です。

スウェーデンの対露認識というのは180度変わりました。冷戦が終わった直後は、ロシアはスウェーデンにとって脅威でないと考えていましたが、クリミアの吸収、ウクライナの情勢を見て、現実にロシアの潜水艦がスウェーデンの領海に入ってくる、ロシアの戦闘機がコレスポンダ（敵味方識別装置）を切ってスウェーデンの飛行機に接近してくる、ロシアの重爆撃機も、これは領海侵犯をしませんが付近を徘徊する、大規模な海軍演習をバルト海で行う、もうかなり険悪な雰囲気になっています。明らかに、スウェーデンはロシアが脅威だという認識のもとに国防費の大幅増を目指していますが、国防費と社会保障費のバランスをどこで取るか、今の政治にとって非常に難しい舵取りを迫られています。

スウェーデンの国民統合の揺らぎ

スウェーデンが直面しているもう一つの問題は、国民の統合はどこまで進んでいるだろうかと言うことです。スウェーデンは比較的早い時代から、朝鮮戦争の孤児を受け入れ、イラン革命ではイランの人々を、エチオピアやエルトリアからの難民を人道的な立場で数多く受け入れてきました。現在、国民の20％は移民及び移民の子供達などが占めています。そのうちの約半分が…７％ですけど、一見したところでもう欧州人、スウェーデン人とは全く顔つきの違う人たちが国民になっているわけです。さらに、去年はなんと８万人の難民を受け入れたのです

が、これはドイツの20万人に次ぐ数です。6万人がシリアから来ているのですが、人道的な立場で受け入れられたシリア難民がスウェーデンの土地に足をつけた瞬間、彼らには永久滞在ビザが与えられるのです。もちろん全てがスウェーデンに残る訳でもありませんので、そのうちアメリカに行く人やオーストラリアに行く人も居ます。しかし、永住ビザを取得した人の中から、本当にスウェーデン国民になりたいと望む人、言葉を学び文化を学び溶け込もうという人を受け入れています。そういう姿勢で長年やってきたわけですが、そのための負担が膨らみ、もともと国民が欲している福祉やら教育サービスの低下が生じてきました。これは典型的な例ですけれども、PISAという学力評価テストの結果を見ると、OECD諸国の中でスウェーデンの学力順位はかなり高かったのですが、現在、急激な低下を示し、数学38位、読解力37位、理科58位です。日本は、数学7位、読解力4位、理科4位です。

この原因を突き詰めていくと、地方の深刻さが浮き彫りになります。6月の時点で6万人の難民を各国で受け入れるという合意がEUの首脳会議でありました。難民を何人受け入れるというのは中央政府がEU首脳会議で決めてきますが、国内でその難民受入数を市町村毎に割り振っています。ソレフテオ市で聞いた話ですが、平穏に暮らしていた村にある日200人ぐらいのシリア難民が突然やって来る。住居と食べ物を与えるぐらいはまあ何とかなるそうです。昔の兵舎で空いているところがあるので。しかし、何が難しいかと言うと、200人位の難民がやってくると、30人～40人の学童児童が居ます。スウェーデンの理想主義からいうと、その年齢に応じて、公立学校の学級に全部割り振られるので、ある日突然、クラスに5人～6人のシリア人難民の子供が編入して来るわけです。スウェーデン語も分からない人が20人のクラスにひとりふたり入ってくると、先生はその子供達に付きっ切りで手取り足取り基本から教えなければならない。今まで、まともに授業を受けてきた子、頭の良かった子たちは、どうしても放置されてしまう。そう言う実情が原因の一つの例です。

この様な状況に対してどう言うことが起こったかと言うと、昨年の選挙では、第1党の社会民主党は緑の党と連立を組んでいます。合計議席数は138です。過半数は175ですから過半数に届いていません。旧共産党が母体の左派党が、是々非々で協力しますと言う姿勢で、この3つの政党が今の政権を担っています。去年の選挙まで過半数の議席を占めていた中道右派連立4党は、もう遙かに数がおよびません。どの様な現象が生じているかと言うと、まさに今のような難民がもたらしている社会現象に異を唱え、この問題を何とかしなければいけない、スウェーデンという国はどうあるべきかと言うことを、本来の原点に立ち戻って主張しているスウェーデン民主党が一気に10%を超える得票を獲得してしまったのです。この党はネオナチに近い政党で右派ですが、右派の中にも右派から中道までの幅がありますが、本当に右の人はかなり過激な議論をしています。今まで政権を担ってきた右派連合、今回政権を奪取した左派連合、双方のどちらかを政権に押し上げるキングメーカーのポジションにスウェーデン民主党が座ってしまいました。年末に向けて与野党それぞれ予算案を提示するのですが、このキングメーカーが与党の予算案に賛同しました。実は、昨年9月の総選挙後、年末に与党が提出した予算案が否決され、否決された時点で解散総選挙がこの3月に行われる予定でした。しかし、短期間のうちに選挙を繰り返し、無駄な予算を使うことになると、最後は一種の大連立になりました。スウェーデン民主党を除く右派連合と左派連合が暗黙の合意をし、今後4年間については、左派連立政権の打倒は行わず、是々非々で賛同することと合意をしています。一応当座を凌ぐだけの基盤を得たのですけれども、大変脆弱な政治基盤であることは間違いありま

せん。大変難しい今の政治情勢です。

移民や難民という問題は、今やスウェーデンモデルの根幹に関わるような課題を突きつけています。20%弱の移民・難民世代の中でも、完全にスウェーデン国民として統合しきれていないドロップアウトがどんどん増え、今や、シリアの戦いでISに加わる若者が300人あまりスウェーデン人の中から出ており、そのうち30名から50名が戦死しています。100名が国内に戻って来て、いつテロを起こしても不思議でないという危険分子であると、治安警察はひとりひとりを監視している状況になっています。今の状況をこのまま続けていいのかと言うことを、ネオナチとか極右とか言われているスウェーデン民主党ですが、彼らの声を通して国民が一種批判票を投じている状況にあると思います。左派連立政権も右派連合も、ただ単に「スウェーデン民主党は極右政党だから言っているは不穏当」とは言えない状況まで、今日のスウェーデンの政治は切迫しています。ただそれでも、スウェーデンは民主主義や人道主義を大切にしており、「難民を受け入れない」ということは口が裂けても言えないのです。ちなみに日本はどのくらい受け入れているかご存知ですか？正式に受け入れた難民の数は、一昨年の統計ですけど、11人です。とりあえず滞在しても良いと認めた難民数は200人ちょっとです。そのレベルでヨーロッパと議論していると、日本は何をしているのだと言われます。

民主主義とか人権というものを引き続き大切にするし、左派連立政権も右派連合も難民を受け入れないとは口が裂けても言えない。ただ、今以上にもう少し上手な政策で彼らを活かす必要があるだろうというコンセンサスがあります。スウェーデンの将来は暗く、これが契機でスウェーデンモデルが崩れてイギリスやらパリのような事件が起きるとは思いませんが、しかし、スウェーデンの土壌はあきらかに変わったと言えるでしょう。

スウェーデンと北海道の関係

私から皆さんにお礼申し上げますが、北海道の地で、夏至祭やヴァーサロペット、ルシア祭等の行事や相互訪問の交流行事を、姉妹都市関係の中で、非常に活発にやっていただいています。レクサンドと当別はそれぞれ25周年、ソレフテオと枝幸は2010年に25年。姉妹交流が25年続くというのは、本当に世界の姉妹都市関係でも珍しいことだと思います。それだけに、当事者の皆様の間のご苦労は絶えなかっただろうと思います。これがスウェーデンと日本と結び続ける非常にシンボリックな役割にもなっていますので、ぜひ当別町長、枝幸町長には引き続き宜しくお願い申し上げます。私もレクサンド、ソレフテオの町に行ってきました。本当に日本語を学ぶ若者が多く、日本のポップカルチャーについて説明してきました。日本の存在感が市長さん、関係者と話していても、よく分かりました。

この先の可能性ということで１つ申しあげておきます。国王陛下が来年満70歳のお誕生日なのですが、普通ヨーロッパの人は０がつくところの誕生日は盛大に祝いますので、また両国交流のいい機会があるかもしれません。

日瑞国交樹立150周年への想い

日本とスウェーデンとは、明治維新と同時に外交関係が樹立されています。2018年は、日瑞国交樹立150周年記念の年で、今から何ができるか、企画作りをしなければなりません。王族皇族の要人往来のほか、日本の女子サッカーチーム「なでしこジャパン」とスウェーデンの女子チームの親善試合、札幌の音楽ホールでスウェーデンのオーケストラ公演など実現すると、札幌でも雰囲気が盛り上がるかなと思います。

（文責　事務局長　横山　隆）

プロフィール：

森元　誠二　駐スウェーデン日本国全権大使

1951年　愛知県生まれ

1975年　外務省入省

　　在ドイツ日本国大使館公使などを経る

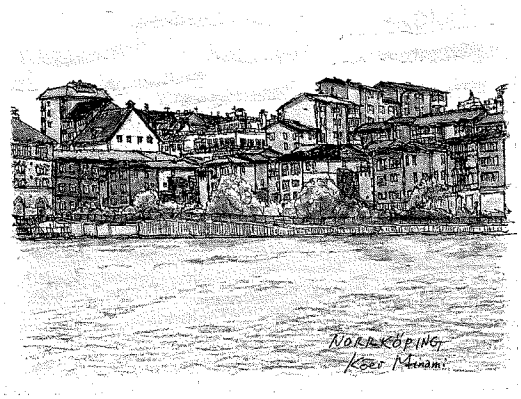
2008～2011年　在オマーン日本国特命全権大使

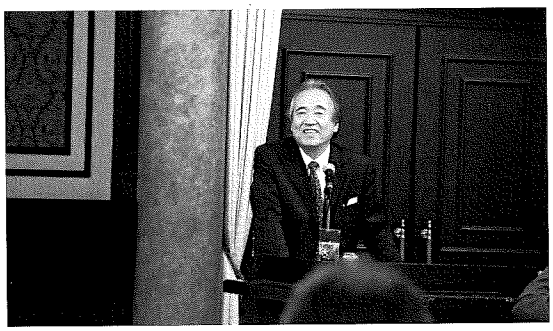
2011～2013年　農畜産業振興機構理事

2013年４月より東京大学客員教授

2013年10月より駐スウェーデン日本国特命全権大使

2015年10月　退任





講演中の森元誠二大使

2007年スウェーデン国王陛下及び王妃陛下主催　答礼晩餐

2014年10月にスタートを切ったロヴェーン政権（社民党・環境党連立政権）

ソレフテオ市での交流25周年記念式典（2013年）

レクサンド市での姉妹都市提携25周年記念式典（2012年）

スウェーデン・日本友好国会議員連盟（SJPA）訪日調査団をお迎えして

横山　隆

2016年４月１日、北海道スウェーデン協会、在札幌スウェーデン名誉領事館、一般財団法人スウェーデン交流センターの三団体共催およびホクテイホールディングスの協賛を頂き、スウェーデン・日本友好国会議員連盟（SJPA）訪日調査団歓迎レセプションをセンチュリーロイヤルホテル20階バンケットルーム「ノーブル」で開催いたしました。

SJPAは５年に一度訪日調査団を派遣しており、今回は14名の国会議員（メンバーの顔写真、所属政党は事務局便りをご参照ください）とコーディネーターとして川崎一彦東海大学名誉教授（本会顧問、スウェーデン在住）が随行されました。

SJPA一行15名は３月27日日曜日に来日し、翌28日月曜日より精力的に調査活動を行いました。その範囲は、スウェーデン・日本における社会課題解決への政策に関する明治大学の先生・学生との意見交換、日本のポップカルチャーが集積した街並みの調査、新幹線の運航技術の調査、ローバック大使による日瑞関係についての最新情報の進講、在日スウェーデン商工会議所との懇談、日本・スウェーデン友好国会議員連盟（JSPA）の衛藤征志郎衆議院議員（大分）らメンバーとの懇談等、29日水曜日一杯までフルに使っての活動とお聞きしています。

３月30日木曜日には、途中で帰国するSJPAメンバー１人を除く14名が、東京～新函館間を新幹線はやぶさ11号で移動し、13：30に到着した新函館北斗駅では高谷寿峰北斗市長、JR北海道総合企画本部瀧本峰男取締役副本部長、鳴海正駅長らの出迎えを受け、歓迎式典に臨みました。

式典後、冬季及び積雪に強い北海道新幹線の概要説明を受け、JR北海道の「はこだてライーナー」で函館へ向かい、工藤壽樹函館市長へ表敬訪問を行いました。

３月31日木曜日は特急スーパー北斗３号で札幌へ移動し、札幌駅に12：41に到着後、出迎えの北海道スウェーデン協会、スウェーデン交流センター、当別町レクサンド都市交流協会、当別町のメンバーとご挨拶を交わした後、貸し切りバスで当別町へ向かいました。

車内で当別町の概要、レクサンドとの交流について説明を受け、当別町庁舎に到着後宮司当別町長を表敬訪問しました。宮司町長は英語で対応され会話がたいそう弾んだとのことでした。

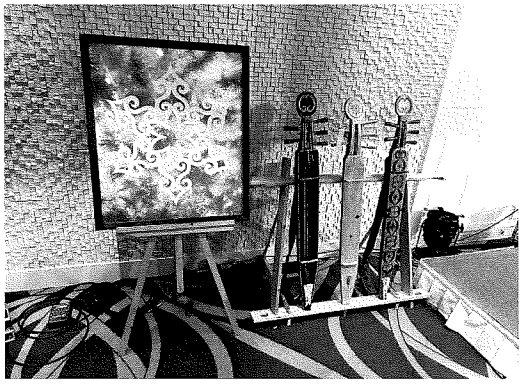
日本の幼児教育の現状を見学し、可能であれば子供達との交流を希望されていましたので、当別レクサンド都市交流協会のご尽力もあり、「地域子育て活動」を進めている全久寺を訪問し、子供達から折り紙や「子供の遊び」を教えて貰いながら楽しく幼児教育を体験しました。その後、スウェーデン交流センターへ移動し、スウェーデン交流センター、当別レクサンド都市交流協会、地域の皆様とフィーカ（茶話会）を楽しまれました。

札幌に戻り、19：00からは札幌市交通局の新しく導入された電車「ポラリス」を貸し切りにし、２時間の市電内パーティーで参加者と交流を深めました。当会の生越、石塚常任理事と東海大学石塚ゼミの学生さんが準備し、SJPAメンバー及び日本側メンバー併せて30名ほどの参加者となりました。

４月１日金曜日は、札幌市交通局地下鉄東豊線で福住駅へ移動し、清田で開業されている鈴木内科医院と併設されているデーケアセンター、関連のケア付き老人ホームを見学しました。SJPAは、日本の高度医療へのアクセスの良さと老人医療体制に大きな関心を持っていて、それぞれの施設調査の希望を寄せていました。

スウェーデン・日本友好
訪日調査団歓迎レ

スウェーデン・日本友好
訪日調査団歓迎レ



鈴木内科医院の鈴木岳院長は本会常任理事でも有り、ストックホルムのノーベル医学賞アカデミーが置かれているカロリンスカ病院にも4年間勤務されておりましたので、日瑞両国の社会制度・人生観などの相違を踏まえてご説明頂きました。

再び地下鉄で都心に戻り、ホテルモントレーエーデルホフ13階随縁亭の結婚式場と諏訪神社を臨むお部屋で、北海道スウェーデン協会主催の昼食会を開催しました。北海道の気候では季節柄とはいえませんが、春の桜花をイメージしたミニ会席を楽しんで頂きました。桜花豆腐、桜海老の先付けに始まり、御膳は数の子ゼリー桜花寄せ、鰆桜花焼き、鰊フライ桜花塩添え、お食事は炊き込みご飯に桜麺、デザートは桜アイスと桜づくしに皆さん感動して頂きました。

食後は札幌市役所へ移動し、秋元札幌市長を表敬訪問。冬の都市会議や冬季オリンピック、まちづくりの話題で予定の20分を超える表敬訪問となりました。歓談後、北海道大学病院へ再度地下鉄で移動。北大病院国際医療部ピーター・シェーン先生の案内で外来病棟、陽子線治療施設を見学し、寳金病院長より大学病院の概要説明を受けました。高度先進医療へのアクセス性に問題があるスウェーデンの事情と、日本の大学病院における一般の方が簡単な手順で医療を受けることが可能なシステムの相違点に話題が集中しました。陽子線治療施設に関しては、類似の施設がEU諸国全体で2施設しかなく、札幌に2施設存在することに驚きを隠せない様子でした。

18：00からは、センチュリーロイヤルホテル20階バンケットルーム「ノーブル」で歓迎レセプションが行われました。

主催3団体を代表して当協会杉本拓会長より歓迎のご挨拶があり、引き続き遠藤連北海道議会議長、辻泰弘副知事からご来賓のご挨拶を頂き、SJPAからは今回の訪日調査団団長のレーナ・アスプルンド議員からご挨拶が有りました。

在札幌スウェーデン名誉領事館の加藤欽也名誉領事の乾杯の御発声で歓談に移りました。

会場では、日中友好協会の理事も務めている石川泰子さんとお仲間による呈茶コーナー（緋毛氈を敷いた縁台と和傘で飾られた）や、アイヌ民族のToyToyさんデザインの小物展示即売コーナーも設けられ、SJPAの皆さんの興味を引いていました。会の途中に、村上枝幸町長、宮司当別町長にもスピーチを頂き、アトラクションではToyToyさんのアイヌ民族楽器ムックリやトンコリの演奏、トニーさんの三味線による沖縄民謡風「知床旅情」の演奏があり、お二人の合同演奏に併せ、会場全体が沖縄の踊りでレセプションを締めさせて頂きました。楽しかった2時間のレセプションもあっという間に過ぎ、スウェーデン交流センター杉野専務理事のご挨拶でお開きとなりました。

レセプション終了後も、会場のあちらこちらで小グループが名残惜しそうに会話する姿が印象的でした。SPJAの皆さんのみならず、日本側からの出席者にも十分に堪能頂いたレセプションだったと感じました。

札幌での最終日、4月2日土曜日は北海道議会庁舎で9：00から遠藤北海道議会議長、三井あき子副議長を表敬訪問し、9：30からは北大公共政策大学院吉田徹教授、遠藤乾教授、法学部鈴木一人教授による「日本の防衛政策・安全保障政策について」と題するレクチャーを受けた後に意見交換が行われ、ロシアとの関係が緊迫さを増したスウェーデンの事情もあり、活発な意見交換が交わされたそうです。

午後には、グスタフ現国王もお気に入りの支笏湖湖畔にある丸駒温泉に移動し、北海道最後の夜を、温泉と心づくしのお料理で楽しまれたそうです。

スウェーデンの国会議員の皆様には盛りだくさんのプログラムだったと思いますが、お迎えした私達にも未だに感動の余韻が残る素晴らしいプログラムであったと感謝しています。携わって頂いた多くの方々のお名前をお一人お一人挙げて御礼を申し上げることは出来ません

が、ここで深く感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。
〈本協会常任理事・事務局長・北海道大学准教授〉

スウェーデンから学ぶ
～北欧デザインプログラムを実施して～

石塚耕一

はじめに

2015年9月、私は東海大学の学生16名を引率してスウェーデンとデンマークを訪問しました。実はスウェーデンには2008年にも訪問していて、この時はスウェーデンの教育を調査するために、レクサンド小中学校、レクサンド高等学校、レクサンド国民高等学校、カールマルムステン工芸高等学校、ミュールビー高等学校を視察しました。また、王立美術大学の卒業研究作品展も鑑賞することができ、その後の教育実践の参考にさせていただきました。

スウェーデンの教育は日本とは制度はもちろんのこと、その考え方から違っていてとても興味深いものでした。先ずはそのことから書かせていただきます。

スウェーデンの教育

レクサンド小中学校を視察していて驚いたことがありました。それはクラフトの授業を参観していた時のことです。ある児童が糸ノコを使用していて指を切ってしまったのです。日本であれば、すぐ保健室に連れて行き、保護者に連絡するということになりますが、スウェーデンでは大きめの絆創膏を貼って終わりです。そして何事もなかったかのように授業が続くのです。ここに日本とスウェーデンの教育に対する違いが出ています。そもそも日本では、危険な糸ノコを小学生に使わせるようなことはしません。安全性が最優先なのです。それに対してスウェーデンではその危険さをも体験させながら実践力を育成するということです。これは、常に「学校の責任」が問われる日本と、「個人の責任」とされるスウェーデンの教育観の違いでもあります。

北欧はデザインの先進地であり、どのような芸術教育がなされているのか興味がありました。フランスであれば「美術」は小学校から高校まで必修になっています。これは自国の文化を大切にするフランスらしいところですが、スウェーデンでは美術や音楽の教育は最低限しか行われていません。体育にいたっては体育館も存在しません。

ホームステイでお世話になったレクサンド高等学校のボンド先生は、ナショナルチームのアイスホッケー選手でした。いくらスター選手であったとしても、日本のようにその指導者になるという道は狭き門です。それはごく一部の人にしか与えられないため、ボンド先生は引退後にクラフトの技術を習得して高校の教員になったのです。スウェーデンでは小学校からクラフトの授業があり、高校では、テキスタイル、金工、ガラス、陶芸なども学べることができます。北欧のデザインが優れているのはこのような教育とも無関係ではないと思います。

レクサンド高校には、クラフトはもちろんですが、グラフィックデザイン、写真、放送、絵画などの授業もありました。多様な科目を設置することによって、一人ひとりの興味関心や能力に応じることができるようになっているのです。芸術教育と言うより、職業に結びついたデザイン力を実践的に育成していくという印象です。

高校のカリキュラムで興味深かったのは、学食とは別に地域に開放しているレストランを設置し、そこで実習することができるレストラン科が設置されていることです。高校に設置されている科目は地域産業とも密接に結びついていて、例えばレクサンドでは、新しいホテル

ができるということで、ホテル科を設置することを教育長が検討していました。このような柔軟で現実的なカリキュラムは日本ではなかなか実現できないことです。

スウェーデンでは教育と職業が密接な関係にあり、職業人を育成することがその目標の一つにになっています。インターンシップについては、5週間企業で職業体験をすることが義務化されています。また、各学校には再教育システムがあり、就職してその仕事が自分の適正に合わないと判断した場合は、高校にもどって教育を受け直すこともできるのです。

レクサンドのデザイナー

さて、今回のスウェーデンを訪問は、授業「海外フィールドワーク」として、北欧の優れたデザインを学びながら国際社会で活躍できる人材の育成を目標にしていました。東海大学国際文化学部デザイン文化学科にとっては初の北欧研修であり、有意義なプログラムとなるように計画しました。その拠点となったのはデンマークのコペンハーゲンにある東海大学ヨーロッパ学術センターであり、私たちはここからスウェーデンのレクサンドへと移動しました。

レクサンドは小さな町ということもあり、人との距離がとても近く感じられます。駅に到着すると日本の国旗を持った市職員やホストファミリーの皆さんが出迎え、心のこもった歓迎イベントを開催してくださいました。その後のプログラムも学生を十分満足させる内容でした。これは当別町とレクサンド市との長い交流があってのことであり、確かな信頼関係から生まれたものだと感じました。

私と二人の学生がホームステイさせていただいたのは、グラフィック・デザイナーであるヨセフィン・ヴェーデルさんの自宅でした。彼女は日本でも作品を発表したことがあり、その独自の技法を生かしたテクスチャーと色彩、そして自然をテーマにしたユニークなフォルムはとても美しく心に残ります。私達にとって幸せだったのはアトリエで多くの作品に触れさせていただくことができたことであり、制作方法を教えていただけたことです。これは学生にとって大きな刺激となりました。

スウェーデンのデザイナーは、日本のような大きな団体展がありその中で活動しているわけではありません。一人ひとりが独立したアーティストとして、個性を出しながら活動しているのです。ただしそこには日本にはないマーケットが存在しています。彼らの作品はまるで家具や食器のように生活の中に溶け込んでいる

のです。どの家庭を訪問しても壁や廊下には絵や写真などが飾られ、それを楽しむという習慣があるのです。

日本では絵画というと油彩や日本画が中心となりますが、スウェーデンではそのような分類は無意味です。デザインや美へのこだわりが強いスウェーデンでは、重厚な絵画よりもイラストレーションやテキスタイルデザインのように壁を彩る作品が好まれます。札幌でも紹介された陶芸作家リサ・ラーソンさんや切り絵作家アグネータ・フロックさんのように子どもから大人まで楽しめ、誰からも愛される作品が中心になっています。本当に好きな作品であれば、そのデザイナーが無名であっても作品を購入するという意識は羨ましいぐらいです。

スウェーデンのデザイナーに共通するのはモチーフです。そのほとんどが花や木、そして小鳥などの動物をテーマにしています。ヨセフィンさんも同様で、そのアトリエはレクサンドの森や小鳥を描いた作品で埋められていました。いかにも自然を大切にするスウェーデンらしいところですが、彼らは一方で独自の表現方法にこだわります。形や色と同様にテクスチャーに個性を求めるのです。もっと言うならば個性こそがデザイナーのアイデンティティになっているのではないかと感じたほどです。

レクサンドの街中にあるデザインショップに、日本の書を意識したカリグラフィデザイナーの作品がありました。その作品は極めて美しく洗練されていました。彼女はストックホルムで活躍していたデザイナーだったようてですが、レクサンドに拠点を移して制作しているとのことでした。大都市よりも小さな町で活動する方が成功を収めやすいというのは日本では考えにくいことです。ここにもスウェーデンらしさを感じました。

心を豊かにするデザイン

レクサンドの国民高等学校では、日本の大学を卒業しデザインを学んでいる日本人の女子学生と出会いました。前回訪問したときにも同じような学生がいました。スウェーデンでデザインを学ぶことは、パリやニューヨークでは学ぶことができないものがあるのではないかと思いました。スウェーデンの美意識は長い歴史の中で培われたもので、H&M（衣料）やIKEA（家具とインテリア）が世界中で成功を収めたように、ここではデザインが日常の中に存在しているのです。それが無意識のうちに美意識を育成する力になっているように思いました。美しいデザインは心を豊かにするのです。

学生にとってのスウェーデンは、全てが新鮮で刺激的なものであったように思います。スウェーデンデザインは、自然の中から生まれ、時間とともにその本質部分だけが培養されていったのではないかと思います。日本には世界に誇れる素晴らしい文化がありますが、スウェーデンデザインに触れることにより、日本文化の良さも認識することができたのではないかと思います。レクサンド市民やストックホルム大学生との交流も有意義でした。

最後になりますが、本プログラムの実施にあたっては、東海大学名誉教授の川崎先生、スウェーデン交流センター、当別町、レクサンド市など多くのみなさんのご支援をいただきました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

〈本協会常任理事・東海大学教授〉

2015年女子カーリング世界選手権の思い出とそれから

鈴木　岳

昨年の話題で恐縮です。昨年の３月11日から22日に札幌で日本では２度目の世界女子カーリング選手権が開かれました。ソチオリンピック

で銀メダリストの強豪スウェーデン代表ももちろん来札いたしました。私が皆様にご案内をしたところ、大歓迎をいただき感謝申し上げます。

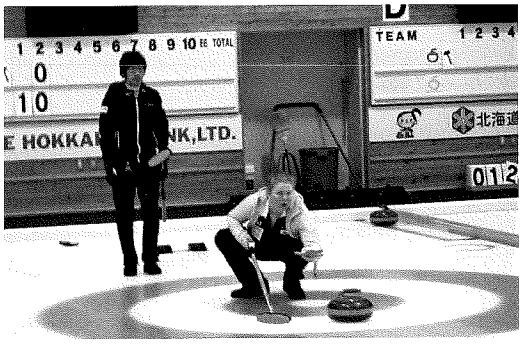
既報の通り、結果はあまり振るわず７位に終わってしまいました。私は2011年までスウェーデンカーリング協会に在籍していた縁もあり、彼女たちをサポートする機会に恵まれました。今回はそのこぼれ話を披露したいと思います。

３月11日はかねてからお願いしていた練習試合をやってくれました。前日に日本入りした彼女たちでしたが、あいにくの猛吹雪で飛行機は函館に降りてしまい、スウェーデン代表、デンマーク代表は汽車で札幌入りしたという災難にあいました。さぞ疲労困憊だったろうと思いますが、快く試合をしてくれました。もう、憧れのチーム　マルガレッタスィフィリドソンと対戦ですから、みんなドキドキでした。ナショナルコーチのペイヤリンドホルムさんを通してお願いした試合で、彼女たちとは初対面でした。恐る恐る、ヘイ、スズキ　ヘーテルヤー（こんにちは、鈴木です）と挨拶するとにこりと笑って返してくれました。あーよかった、スウェーデン語を話すのは久しぶりでしたが、まだ通じたと安堵しました。スウェーデンの太めのスキップ、マルガレッタと最後に投げるマリアプリッツさんはどちらかというと強面バイキング系に見えます。しかし、付き合ってみるととても知的で物腰のやわらく控えめなスウェーデン人らしい方達で、すぐに打ち解けました。スウェーデンとの試合は３－５で負けたのですが、そこそこ試合になったのは自信になりました。

３月13日は公式歓迎レセプションがありました。会場には全ての参加チームがきており、私は役員で参加しているものの大興奮を隠しきれませんでした。

この会場でナショナルコーチのペイヤリンドホルムさんと再会しました。彼とは一度だけスウェーデンで話したことがあるだけなのに今回の練習試合を組んでくれました。彼自身、スウェーデン男子代表を長年勤め、世界選手権を３度も制した名スキップで、私の憧れの選手です。ちなみにカナダ以外で３度も世界をとったのは彼だけです。３月14日より大会が始まってからは通訳ボランティアで裏方を勤めながら、試合前後の選手たちを見る貴重な機会に恵まれました。試合前の入念なアップ、真剣な姿は大

チームスウェーデンと



名スキップ　マルガレッタと私

練習試合をとりもってくれたナショナルコーチ、ペイヤリンドホルムさん

いに刺激を受けました。不調が続くスウェーデンにはブラーヨッバ（おつかれ）、リッカティル（幸運を）、インゲンファーラ（大丈夫）とか声をかけるのが精一杯でした。大事な最後を投げるマリアプリッツさんは乳糖不耐症で豆乳などの大豆製品しかうけつけない体質でした。スウェーデンでは乳糖不耐症の人のためにどこのスーパーも豆乳や豆乳ヨーグルトが置いてありますが、日本では意識しないと見逃してしまいます。スウェーデン人にとってミルクとヨーグルトは主食ですから、スーパーを巡って探し回り、届けました。この機会に初めて豆乳ヨーグルトがあることを知りました。リンドホルムコーチが練習指導時にカーリングシューズをホテルに忘れてきたこともありました。その相談を受け、この時は幸い札幌カーリング協会会長と足のサイズが一緒で、なぜか試合もないのに会長が靴を持ってきており借りることができました。

3月21日にスウェーデンチームはオフでした。この時、スキップのマルガレッタさんとフォースのマリアプリッツさんを小樽観光に連れ出しました。

おかしかったのは寿司屋のことでした。スウェーデン人は寿司が大好きです。それで小樽に連れ出したのですが、サーモン以外のネタはダメなんですね。試したこと自体がないようで、恐る恐る口に運んでいました。残念ながらどれもあまり口に合わないようでした。サーモンもノルウェー養殖サーモンと違い、日本のサーモンは脂が乗っていませんから期待はずれだったようです。その他のネタは味が薄く感じていたようでした。特に可笑しかったのはウニでした。なますを吹くようにほんのちょっとだけ箸につけて味見をしただけでした。それじゃ味がわからないからいっぺんに口に入れるようにアドバイスしてもできませんでした。そのままギブアップです。もったいない。驚いたのは醤油の使用量です。さすが、北極圏代表、スールストレーミングの産地から来ただけありま

北一ガラスで

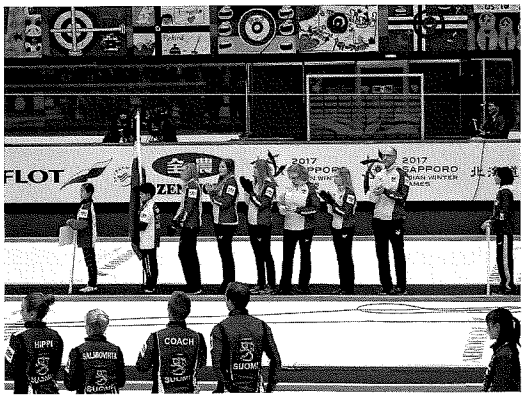
小樽運河で

小樽の寿司屋にて

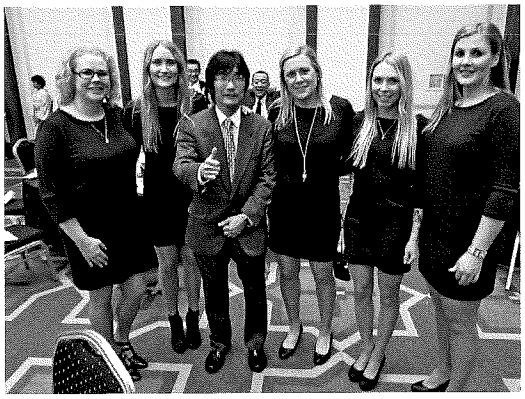
す。ドボドボに寿司を浸して食べてました。3人でしょうゆ差しの半量を使ってしまいました。

夢のような時間はあっという間に経つもので22日は最終日でした。優勝はスイスでした。

夜のさよならレセプションではシックに決めた彼女たちがいました。パーティーでは名残を



閉会式にて。ちょっとしょんぼりしたように見えました。


さよならパーティーで

二次会　ディスコパーティーで　中央がマルガレッタ、右の横側がサラ

惜しんでくれたのは大変嬉しかったです。再会を固く誓いました。

あの夢のような世界選手権から１年弱がすぎました。今年も彼女たちのチームは不振で世界選手権は９位に沈みました。日本では北見のロコソラーレが大活躍をして、日本初のメダルを獲得し、歴史を塗り替えた大会となりました。

今回助っ人に参加した若いサラ　マクマヌスさんは今年から私が在籍していたスンビベリカーリングクラブ所属のチームハッセルボリに加入し、次期代表を目指しています。そしてマリアプリッツさんは引退し、ハッセルボリのコーチに就任しました。稽古をつけてもらった私のチームは急成長を遂げ、北海道選手権で優勝、日本選手権初出場で５位になりました。さらにチームメンバーの高校生が世界ジュニア代表となり、さらに彼と大学生がミックスダブルスという競技で日本選手権の銀と銅を獲得し、私はその縁で平成28年度カーリング競技部門の日本オリンピック委員会強化スタッフを委嘱されました。たった１年弱で随分と大きな歯車が回りました。やはり世界選手権での刺激なしではなかった変化だと感じます。いつかカーリングでスウェーデンに凱旋したいものです。

〈本協会常任理事・鈴木内科医院院長・理事長・札幌カーリング協会理事・強化部長・H28年度日本オリンピック委員会強化スタッフ〉

北欧で開催された世界ジュニアBカーリング選手権2016に日本代表として出場して

石田晃造

私たちは、札幌カーリング協会所属の鎌田渓と青木豪（高校１年生）、南富良野カーリング協会所属の新野和志、戎家宙、佐々木彩斗（中学３年生）、目黒義重、石田晃造（コーチ）で構成されるチームです。普段、札幌で活動しているときは絆ソラプチ、北海道と日本で活動しているときはチームにいのというチーム名で活動しています。平成28年１月３日から10日、フィンランド、ロホヤで開催された世界ジュニアBカーリング選手権2016に日本代表として参加し

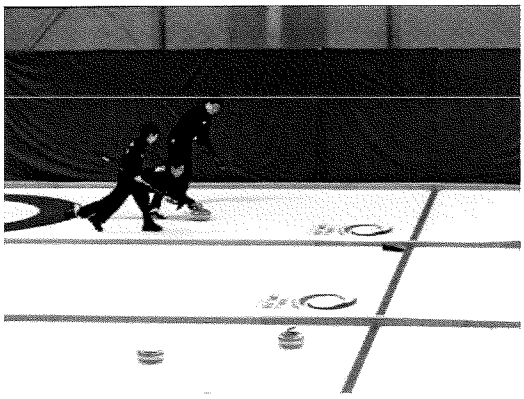
てきましたので、報告させていただきます。

私たちのチームは、３年前に第12回日韓青少年冬季スポーツ交流事業（日本体育協会主催）において、韓国で試合をした経験があり、今回が２回目の国際試合です。選手にとっては、試合に向けての練習をしながらのフィンランドへの渡航準備、親と相談しながら、そして、スマートフォン等を駆使して、フィンランドの情報を得ながら、準備を進めていきました。冬休みの学校の宿題も準備し、スーツケースはすぐに23Kgを超えてしまい、そこから、できるだけ荷物を削る作業は出発前日まで続いていたようです。時間があれば、フィンランド語を覚えて、挨拶や自己紹介ができるようにしておきたかったのですが、カーリング用語、そして中・高校英語でフィンランドでの生活を乗り切ることになりました。

私たちは、12月30日に新千歳空港から成田空港へ行き、女子の代表チーム（長野カーリング協会所属）と合流し、翌朝の出発に備えて成田空港近くのホテルに宿泊しました。成田空港では、日本円からユーロへ換金。選手は、情報でフィンランドの物価が高いのは知っていましたが、なかなか実感がわかず、一体どれだけ換金しないといけないか……だいたい２～４万円分のユーロを準備しました。31日朝にJALにて、ヘルシキンキ・ヴァンダー空港に向けて成田空港を出発、31日の昼ごろに到着しました。入国後、タクシー（なんとVIP）で世界選手権の会場であるロホヤ市Kisakallioに向かいました。この時点で、現地時刻午後３時位で周りは真っ暗の中、選手たちは疲れ見せることなく宿舎に入りました。到着早々、食事棟で最初の晩御飯。人参の生の千切り、生トマト、生きゅうり、ピクルス、じゃがいものソテー、サーモンのフライ、パン、ヨーグルトもあった。料理の名前はわからないけど、種類もとても充実していた。ごはんや味噌汁はなかったけれど、食事環境はとてもよかった。選手は、食欲旺盛、そしてとてもうれしそうに、お腹一杯食べました。国際

試合で苦労することの一つに食事があり、私たちのチームは、乾燥野菜、インスタントごはん・スープ、ドレッシングを大量に持ち込んで、どのような状況でも対応できるようにしていましたが、心配は無用でした。31日夜と言えば、日本では、家族団らんテレビでもみながら、年末を迎えるところですが、テレビを観てもよくわからないので、みんなで年越しそばを食べながら、元旦を待ちました。外からは花火の音がしてきました。フィンランドは元旦を花火で祝うのかな？残念ながら、私たちの宿舎から街の様子がわからなかったので、本当のところはわかりませんが。

１月１日朝５時30分から、試合スケジュールに体を慣らすために、散歩をしました。肌を刺すような寒さ、北海道に住んでいるが、１月にここまで寒い日はなかなかない。まだまだ、日の出にはほど遠く、街灯がほとんどない中、月明かりの中を30分、ゆっくり歩きました。その後、朝食を食べて８時30分になっていたが、まだ日の出を迎えていなかった。10時頃に、ショッピングセンターに買い物に行くことにしました。日本でいう元日、ロホヤ市内のショッピングセンターが休みだったこともあり、唯一開いていた24時間営業のABCmartに行き、お土産と日本選手団団長主催のパーティーの食材の買い出し、そして、昼食をとりました。食料品店では、果物（りんごやオレンジ、バナナ、洋梨など）、野菜やお肉は日本と同じものが並んでいたが、野菜の種類が少し少ないような気



がした。この寒さ、日照時間を考えると十分な野菜が育たないのかもしれない。一方で、お菓子のチョコレートの種類がとても多い。おそらく、フィンランド人はチョコレートの違いがわかる人が多いに違いない。なぜ、チョコレートを好んで食べるのか？いつか調べてみたいと思った。午後はフィンランド唯一の大会会場内になるカーリングシートでの練習。日本のカーリングシートはとてもきれいに管理されているのと違い、周りにゴミが多く、リンク以外では、日本人がきれい好きなのか、きちんとし過ぎなのか、カーリングをする環境の違いがおもしろかった。

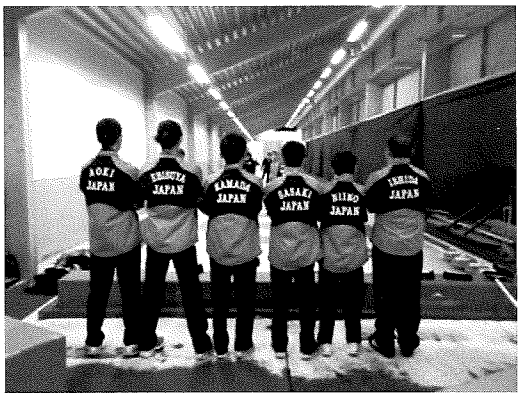
１月２日、大会前の最終調整を行った。時差ボケもなく、食事の問題もなく、選手の体調はほぼ万全に整えることができた。気分転換をする時間がないのが、すこし気がかりではあったが。

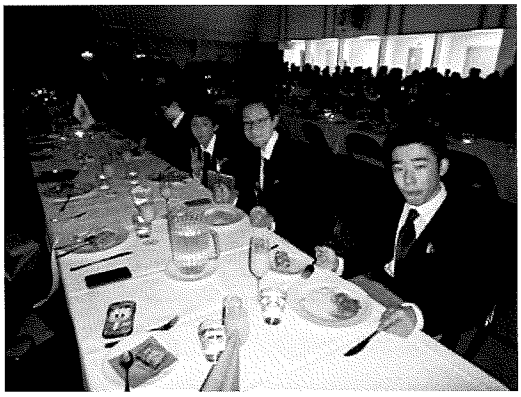
大会成績（１月４日～８日）

日本　７－６　ラトビア：
みんなの緊張の中、はじめての氷に対応するのに時間がかかった。最終エンドに、フォース青木のショットが決まり、３点を奪取して、見事勝利しました。
日本　４－５　ドイツ：
１点ずつを取り合う緊張の展開がつづき、最終エンド、ほぼ勝利を手中におさめかけたが、ドイツチームのスーパーショットが決まり、惜しくも敗れる。相手チームのショットに脱帽。
日本　９－２　リトアニア：
序盤より、確実に加点し、終始日本チームが主導権を握り、勝利しました。
日本　３－５　ポーランド：
１点ずつを取り合いの展開が続き、最後まで、２点を奪える形が作れず、ポーランドチームに逃げ切りを許し、惜しくも敗れた。
日本　11－２　香港：
この試合で、フォースの青木を休ませ、フィフスの佐々木を入れた。序盤から、加点し、終始試合をコントロールし、勝利した。
日本　４－１　ニュージーランド：
慎重な試合展開に終始し、前半戦４エンドは、１－１。後半、一気に仕掛けて、加点に成功し、勝利した。
日本　３－５　韓国：
プレイオフをかけた一戦。４エンド目に２点を取り、リードしたものの、６エンド目に４点を奪われ、敗れる。プレイオフをかけた、同グループのドイツ対ポーランドでポーランドが金星を挙げ、私たちのチームの予選通過の可能性が絶たれてしまった。

グループA　８チーム中４位で予選通過が叶いませんでした。

１月10日、フィンランドでの滞在もあと二日。私たちは、日本代表女子のロシアとの決勝戦観戦。決勝舞台に立つことの意義は大きい。日本代表という大きなものを背負いながら、戦うということは、何を意味するのか。戦いに負けた私たちのチームには、もうその背負うものがない、しかし、それがない心地よさ、複雑な心境だった。ジュニアの選手達にとって、フィンランドの地での戦いが、どう経験になっていくのだろうか。結果で示していくしかない。女子の結果は、残念ながらロシアの勝利。日本代表女子は、準優勝という結果に終わった。その後、





選手たちと、会場周辺の散策に出かけた。初めて、ゆっくりとフィンランドのこの地のことを考えるときが来た。当たり前のことなのだが、同じ地球にいながら、空気を吸いながら、フィンランドと日本の差とはなんなのか。なぜ、食べる物が、異なるのか？建物の形や走っている車など、たくさんの異なる部分について話した。フィンランドのこの厳しい寒さ、日照時間の短さから、生まれてくる物と人、私たちとは異なる価値観を生み出してきたに違いない。その価値観をもってカーリングをするということ、うまくは説明できない、なにかが見えてきたような気がした。夜は、晩餐会。疲れているコーチを置いて、選手は、多くの外国の選手とのダンス交流をした。試合を終えた選手たちが、楽しく交流できる時間は、ほんとうにすばらしいこと。選手の目がいきいきとして、また、この地に戻って来たいと強く思った。そして、1月11日、フィンランド出発の日。移動のみで終了し、無事成田空港に到着。今回の旅を終了した。

この世界選手権を終え、私たちはまた来年の世界選手権出場を目指して、スタートを切っています。今回は、ヨーロッパの強豪であるスウェーデンチームと対戦できませんでした。ヨーロッパの地で、世界選手権Bを通過するためには、ヨーロッパチャンピオンであるスウェーデンのカーリングを研究する必要がありそうです。私たちのチームに足りないものはなんなのか、しっかり分析をしながら、チームにフィットさせていきたいと考えています。

最後に、フィンランドで開催された世界選手権にも関わらず、暖かいご声援をいただいたスウェーデン協会の皆様と、その縁結びをしていただいた、医療法人社団　鈴木内科医院院長の鈴木岳先生に深謝申し上げます。

最後に、選手からの感想文に書いてもらいましたので、一読頂ければ幸いです。

●新野和志（ポジション・リード）

自分が世界予選B（フィンランド）に出場して、感じたことは２つあります。

１つ目は食生活の違いです。初日にレストランへ行ってみてとても驚きました。日本では主食が米でしたが、フィンランドでは主にパンやイモでした、米も出ましたがタイ米のように細長く日本とは大きく違いました。ですが、回数を重ねていくうちに慣れていきました。大会の後半では、好きな食べ物ができたり、食べられないものもなくなるほどした。

２つ目は多くの国との交流です。最初はどのチームにも話しかけづらくてコミュニケーションがとりづらかったですが、試合前や試合後などに会話することによって友好を深めることができました。特にホンコンのチームは積極的に話しかけてくれたり、一緒に写真を撮ったりしてくれました。最終日のパーティーでは一緒にご飯を食べたりダンスを踊ったりユニフォームの交換などをしました。

最後に、自分はこの大会で世界の厳しさや、自分たちの短所にきづかされました。これからは、多くの試合経験を積みながら、短所を減らしつつも長所を伸ばして必ずもう一度同じ舞台に立ちたいと思いました。

●鎌田渓（ポジション・セカンド）

フィンランドで過ごした10日間はとても不便なく快適でした。リンクの状態もとてもよくフィンランドの方々や協会員方の協力で大会の進行もとてもスムーズでした。試合の観戦ができる素晴らしい施設もあり、各国の人々も全力で応援などできていたと思います。またkisakallioの職員の方々も明るい挨拶をしてくれました。とてもあたたかい人が多いんだなと感じることができました。kisakallio周辺にはたくさんの木々やとても大きな湖など日本では体感できないような広大な自然も楽しむことができました。綺麗な空気環境や水、食事、すべてが自分にとって新しい体験になりました。今回の大会では来シーズンに向けての課題や目標ができました。この課題、目標ができたのも今回の大会会場がなかったらできなかったものです。自分にとって本当に良い経験になりました。

●戎家宙（ポジション・サード）

World Junior B Curling Championship出場のためフィンランドに行きました。そこでは、日本とは違った環境や文化に、驚くことがありました。僕たちがフィンランドに着いて一番驚いたのは、日照時間の短さです。夕方の３時ぐらいにフィンランド空港に着き、外を見るとすでに日は沈み、真っ暗になっていました。また、フィンランドは気温がとても低く、３日連続マイナス25℃というときもありました。

僕たちは宿に到着するや否や、現地時間の５時丁度（日本時間の０時）になるまでのカウントダウンをし、新年（？）を迎えました。夕食は、現地の独特な野菜や料理を色々と試しましたが、慣れない味に苦戦しました。その翌日、僕たちは買い物をするため近くのスーパーに行きました。そこには、フィンランドならではのお土産や、見たことのないようなお菓子などがたくさんありました。必要なものを買い揃えレジに行くと、店員は、初めて使う通貨に戸惑う僕たちをやさしくサポートしてくれました。僕はそこでフィンランド人のやさしさを知ることができて、一安心しました。

大会が始まるまでは会場内にある練習用シートを使って、２時間程度の練習をして、体をなまらせないようにしていました。

現地の食事にも慣れ、全員万全な状態で試合に臨む事が出来ました。多少の緊張はあったものの、最後まで根気強く戦うことが出来ました。

大会最終日のバンケット（晩餐会）では、他国のチームとユニフォームの交換をしたり、一緒に写真を撮ったりと、いろいろな形で交流を図ることが出来ました。

最後に、こうやって貴重な経験が出来たのも様々な方のサポートのおかげです。心から感謝

しています。

●青木　豪（ポジション・フォース）

フィンランドは北海道よりも高緯度にあり、とても寒かったです。一番冷え込んだときはマイナス三十度にもなり、空気を吸っただけで体が凍りつきそうでした。日本との時差が七時間あり、合わせるのが大変でした。更に、日の出の時刻が約午前十時、日の入りが約午後二時と、とても日照時間が短く、朝起きても太陽が昇っておらず、体が起きなくて大変でした。

フィンランドの人はとてもフレンドリーでやさしい人が多かったです。挨拶をしたら、笑顔で返してくれて嬉しかったです。

フィンランドの食べ物は芋類とパン、タイ米が主食でした。野菜や肉類もあり、中でも鶏肉と豚肉がおいしかったです。パンにも色々な種類があり、どれも美味しかったです。

今回フィンランドに行って、色々新しい事に出会いました。また機会があれば、行きたいです。

●佐々木彩斗（ポジション・フィフス）

平成28年１月３日から９日まで開催された世界ジュニアカーリングB大会に参加するためにフィンランドのロホヤに行きました。

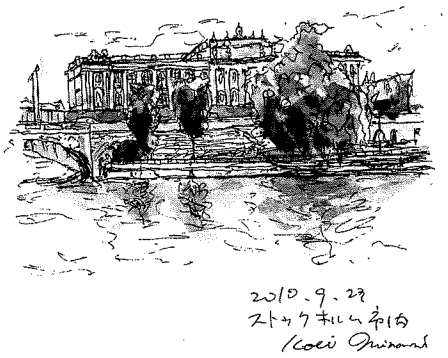
フィンランドのイメージは私の住んでいる北海道と同じような気候で雪が多く、寒い所だと思っていました。また、サンタクロースのいる国なのは知っていましたが、友達にムーミンの国であることを教えてもらい日本で作られた物語だと思っていたので驚きました。

実際に行ってみると雪は北海道より少ないかわりに少し寒い感じがし、１日の日照時間が短く、午後三時位にはすでに真っ暗でしたが、空を見上げると星がとてもきれいでした。

食事はジャガイモをそのまま茹でた物や、焼いた肉があり、どれもおいしく、毎日お腹がふくれるまで食べました。日本で北海道のジャガイモが一番おいしいと言われていますが、それを上回るおいしさでした。

今度は、夏のフィンランドに行ってみたいと思いました。

〈南富良野カーリング協会〉



北海道スウェーデン協会
平成27年度の主要行事

■５月11日月曜日
第１回常任理事会　会場：北海道大学学術交流会館

■５月28日木曜日
平成27年度理事会、総会、講演会及び懇親会
（ホテルモントレーエーデルホフ札幌）
〈総会・懇親会出席者24名〉
―講演会―
「スウェーデンの文化と教育から学ぶ」
講　師：石塚　耕一　教授（東海大学国際文化学部デザイン文化学科）
参加者：44名

■６月４日木曜日
協会誌「白夜」36号発行

■７月６日月曜日
講演会「スウェーデンの現在」
講　師：森本　誠二　大使（駐スウェーデン日本国特命全権大使）
参加者：50名
共　催：（公社）北海道国際交流協力総合センター（ハイエック）
後　援：在札幌スウェーデン名誉領事館、（一財）スウェーデン交流センター
ホイスコーレ札幌
歓迎レセプション
参加者：22名
会　場：ホテルモントレーエーデルホフ札幌

■９月17日木曜日～９月28日月曜日
北欧の豊かな時間「リサ・ラーソン展」後援
入場者数14,000人

■12月５日土曜日
第２回常任理事会　会場：北大中央キャンパス研究棟２号館

■12月６日日曜日
第22回スウェーデンルシアを迎える会に協賛
参加者：800名
会　場：恵庭市民会館大ホール
主　催：2015スウェーデンルシアを迎える会

■12月23日水曜日
旭川スウェーデン協会クリスマス会に参加
（横山事務局長）

■１月15日金曜日
世界ジュニアカーリング選手権に参加する札幌カーリング協会ジュニアチームに協賛

■１月26日火曜日
新春講演会および新年交礼会（北大ファカルティハウス「エンレイソウ」）
〈新年交礼会出席者34名〉
―報告会―
「スウェーデンの文化と教育から学ぶ」をテーマに学生からの報告会
講　師：石塚　耕一　教授（東海大学国際文化学部デザイン文化学科）、学生10名

■４月１日金曜日
スウェーデン・日本友好国会議員連盟訪日調査団　歓迎昼食会
参加者：18名（ホテルモントレーエーデルホフ札幌「随縁亭」）
スウェーデン・日本友好国会議員連盟訪日調査団　歓迎レセプション
参加者：80名（センチュリーロイヤルホテルホテル）

〈事務局長〉

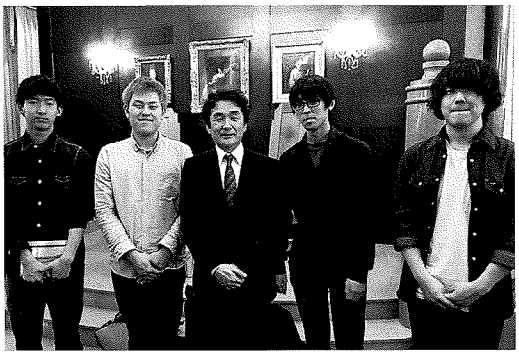
事務局だより

事務局長４年目になりました横山隆です。平成27年度も（公社）北海道国際交流・協力総合センター（ハイエック）、（一財）スウェーデン交流センター、在札幌スウェーデン名誉領事館およびホイスコーレ札幌の皆さんと手を携えて活動させていて頂きました。厚く感謝申し上げます。

平成27年度の活動を振り返り、ハイライトでお伝えしておかなければならない事項を５つ挙げてみたいと思います。

一番目は、５月28日の平成27年度理事会・総会に合わせて開催いたしました第１回北方圏講座。東海大学国際文化学部デザイン文化学科石塚耕一教授に、「スウェーデンの文化と教育から学ぶ」と題してご講演いただきました。併せて、９月に北欧調査旅行を計画中の東海大学の学生さんたちにも抱負を語ってもらい、石塚先生の瑞々しい感受性と学生さんたちの希望溢れるエネルギーを感じる講演会となりました。

二番目は、森元誠二駐スウェーデン大使の講演会を開催することが出来たことです。当初、在外駐在大使会議に出席される森元誠二大使の訪日スケジュールに合わせて２月初旬と３月末の２回講演会を企画しましたが、イスラム圏のみならず欧州全域の政治的緊張から「邦人の安全確保」に全力を挙げるよう日本政府から在外公館に禁足令が指示されて来日が叶わず、政治的緊張も緩むことがなかったために在外駐在大使会議も延期となってしまいました。



記念品として差し上げたアイヌ文様の法被を着て生越常任理事と

村上枝幸町長、宮司当別町長と

三度目の正直という諺もありますが、7月6日月曜日17：00からホテルモントレーエーデルホフ札幌1階ワーグナーハウスを会場に、森元誠二大使に、政権交代後のスウェーデンの様子や、ギリシャ財政問題を含めたEUの政治状況について、最新の情報を伺う事が出来ました。

また、講演会に先立つ昼食会では、スウェーデン関係諸団体の主要メンバーやはるばるお越し頂いた村上枝幸町長と、落ち着いた雰囲気の中で交流も深められました。また、講演会後の歓迎レセプションでも、出席された皆様のテーブルを順番に回られて会話し、大使の外交スピリットに皆様感銘を受けていました。

三番目は、12月23日に行われた旭川スウェーデン協会のクリスマス会に参加させて頂いたことです。70人近い参加者が和気藹々と集う姿は、長年、旭川バーサ大会をボランティアとして支えてこられた歴史の積み重ねのなせるわざと感心いたしました。「前年のクリスマス会では120名近い参加があったので、今年は声かけを控えました」との東郷会長のお言葉に二度びっくりいたしました。今後、旭川スウェーデン協会とのネットワークを深めていかなければとの思いを強くした次第です。

四番目は、1月26日に行われた新春講演会と新年交礼会。9月にスウェーデンを訪問した東海大学石塚教授のゼミ学生さん10名から、「スウェーデンの文化と教育から学ぶ」をテーマとした北欧調査報告を語って頂きました。参加者の平均年齢も大幅に下がり、賑やかな会となりました。

五番目は、なんと言っても平成27年度最大の行事となりました、スウェーデン・日本友好国会議員連盟訪日調査団対応です。詳細は別稿をご覧頂ければと思いますが、スウェーデンの国会議員の皆様と準備を進めたスウェーデンに関連する団体の皆様にとっても実り多いスケジュールとなりました。コーディネーター役の川崎先生のご苦労に深く感謝いたすとともに、ご参加頂いたみなさま、本当に有り難うございました。

〈事務局長　横山　隆〉

スウェーデン・日本友好国会議員連盟訪日調査団メンバー

		氏名（英語）	氏名（カナ）	所属委員会	政党	性別	備考
1 団長		Lena Asplund	レーナ・アスプルンド	防衛委員会	穏健党	女性	1956年生
2		Lotta Olsson	ロッタ・オルソン	防衛委員会	穏健党	女性	1960年生
3		Lotta Finstorp	ロッタ・フィンストルプ	社会保障委員会	穏健党	女性	1958年生
4		Cecilia Magnusson	シシリア・マグヌソン	文化委員会	穏健党	女性	1962年生
5		Anette Akesson	アネット・アーケソン	税制委員会	穏健党	女性	1966年生
6		Boriana Aberg	ボリアーナ・アーベリ	交通問題委員会	穏健党	女性	1968年生
7		Pia Hallstrom	ピア・ハルストローム	社会厚生委員会	穏健党	女性	1961年生

		氏名（英語）	氏名（カナ）	所属委員会	政党	性別	備考
8		Gunilla Nordgren	グニラ・ノルドグレン	環境及び農業委員会	穏健党	女性	1956年生
9		Ulf Berg	ウルフ・ベルイ	産業貿易委員会	穏健党	男性	1957年生
10		Maria Plass	マリア・プラス	財務委員会	穏健党	女性	1953年生
11		Sotiris Delis	ソティリス・デリス	外務委員会	穏健党	男性	1955年生
12		Jan Eriksson	ヤン・エリクソン	財務委員会	穏健党	男性	1961年生
13		Fredrik Eriksson	フレドリック・エリクソン	法務委員会	ス民主党	男性	1975年生
14		Richard Jomsho	リチャード・ジョムシェ	教育委員会	ス民主党	男性	1969年生

表紙の絵

南　幸衛

この絵は、2015年12月まで当別町にあるスウェーデン交流センターに勤務されていたルイース・ビュールンドさんが、2015年春のイースター（復活祭。スウェーデン語で「ポスク」）で魔女に扮した時の姿を描いたものです。イースターは、本来、キリストの復活を祝う行事ですが、スウェーデンでは長く暗い冬が終わり春の訪れを祝い、楽しむお祭りだそう。子供たちは、魔女の格好をして「Glad Påsk（Happy Easter）」と言って近所の家々を回り、お菓子などをもらう。女の子は、魔女に変身するため頬を赤く塗り、その上にそばかすを描き、スカーフをかぶり、長いスカートとエプロンを身につけます。空を飛ぶ「ほうき」も必要なアイテムです。ルイースさんの格好はイースターを楽しむスウェーデンの女の子そのものでした。

ちなみにルイースさんは、スウェーデンの民族楽器・ニッケルハルパのリックスペルマン（スウェーデンの公認民族音楽家）の資格を有する演奏家であり、現在、東京で働きながら、音楽活動の幅を広げつつあります。おちゃめで、チャレンジ精神旺盛なルイースさんをこれからも応援していきたいと思っています。

〈本協会常任理事〉

発 行 人
北海道スウェーデン協会
会長　杉　本　　拓

〒062-0911
札幌市豊平区旭町３丁目1-7　北海道東リビル３階
㈱アラゼン内
TEL(011)837-8411

印刷／㈱アイワード
札幌市中央区北３条東５丁目
TEL.241-9341 FAX.207-6178